

安位寺殿御自記

三十七

内閣文庫	
番號	和 20909
冊數	82(38)
函號	古 19 359

古文書
一九四〇年八月
三五九號



38
1

35-12

長
祐
之
年
二
月
日

三
九
三
共
全

零
綴

附

向事の院事

一後院事の院事

初火の事の院事

一後院事の院事

中火の事の院事

一後院事の院事

中火の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一宿の事の院事

一引の事

一本の事

一元の事

一元の事

一元の事

一元の事

一元の事

一元の事

一元の事

長編二三ノ所

35
4

其首
正屬之行前
事あえす方當も

其首
在多々黒と寫すねり往けには記也
可見其目極に申る神社是也同上
而此主紙等也

其首
新官事の院和松江
板書を貰ふ官城の内所にて松江
男のくわんとお取
え次と之解え立高言
前松江向らゆきよよりゆかみゆく
きくはい下ゆけ下
も向列ゆくわゆ
ある二本立上り
まつて立て地に二脚等とてより立
仰頭とまめ入ひうちやこまめや草原

上樹し仰み、上方り金見し。あひて三而
 少々と上御の相移り。主事御の御
 痘瘍引元入り。正形少々。主事御の御
 せりり向ふ。御手。主事二酒を主而御
 信膳事院住御。其酒是信膳御酒也。
 信膳御は下御之御。御手。同有御。社
 徒役信膳。主酒。同御。同御。
注信膳御

火あ人ひく其手を相付。御三膳御事
 一物御事アリ。火あ人ひく。御四年
 事院住御。御手。御手。御手。御手。御手。
 駕内。主事御酒也。主事御酒也。主事御酒也。
 駕内。主事御酒也。主事御酒也。主事御酒也。
 駕内。主事御酒也。主事御酒也。主事御酒也。
 駕内。主事御酒也。主事御酒也。主事御酒也。

一ノ馬一と吉道大刀代子とまし

一紅地院住候御師 出れ波御子也

吉留田

一白移て行ひ半日市中下車移行事あらゆる
一石移て行ひ半日市中下車移行事あらゆる
一石移て行ひ半日市中下車移行事あらゆる

九月舟

事あらゆる本門お詫す カ神ニテ

往來上刀根白川一松原

高齋え次元之

吉留田

事あらゆる本門松之松土刀根味

おほな事院主御傳説上支

吉留田

御月本

初日舟

の國方徳皇を譽め
一句角向二度木賊山不前御

翁

古事記動植物の御祝

佐和光

御祝

首

セミ一写於於草に、此處御祝

正直主通事

之手御祝

一

久品

一初夏の天朝と百姓と御方部、
新秋高元之林中、い入る所より佳也
川色と御雲言而う、三清多御御
音節、おれを放去れ(モ)の天有りと
國事

一吉上事

一主三威を事に成る所の事に移る

二三の御前
御前書しり書きある行方

一此のトモモササハシテ
大帝任取所に候て御心より御方
二戸主ニルハ館付

呂門主也

が三浦守也と云ふ事は主事の事

始終も多邪
吉川に向れ

官物

七日
吉川

八日モ
リカレ西側に近代御之
は元貢使油同元の海見志林室
足師
織織
古而古不坐反
古而古不坐反
古而古不坐反

支那の事は、今朝の二京の物質

事務局にて見え

会

支那の事は、今朝の二京の物質

特許局にて

支那の事は、今朝の二京の物質

特許局にて

九月六日、西京

支那の事は、今朝の二京の物質

十日丁度

青目バ版
勿油肉不加水
一り又は三日以上水を加水

支那の事は、今朝の二京の物質
支那の事は、今朝の二京の物質

支那の事は、今朝の二京の物質
支那の事は、今朝の二京の物質

山口文

大内主軍
善松山事作下平松一牧翁之軍 打本御原
一毛利金公言五吊金

土六月三日

神武國事大ひ 因第性共付賊 ひよす
益以茶奉奉ニ文る川上手打廿一文貢
利口経、其本富川上手立川源山川
加賀とむかの魚魚鹽仙うの背写本
年生と往々多劫かく。主那二ノ子市
市中えひて高國市院國國上し防風又
せゆ作骨木逃亡す。升立(高下)ト考
國二三とす中江又云之をかづか
宣賀已以之ひ乃市

七月八日并
大内主軍事作下平松一牧翁之軍
益松山事作下平松一牧翁之軍
益松山事作下平松一牧翁之軍

大内主軍

かのうまひとし病と主訴説而實其事
之上症よりは極度久しう久延行多竹之法
情狀と利害申申申しに之を被る者
トシテ死んで之を移す事も一五水引竹と
言ひ本源之を之に満滿也

一臣下れ白言すも之を言え吉以同多
初有行方と云ひ此は其始之う少子滿
汗麻はむ是竹下身が既て之を元用

高角

五日西子舟
魚行向所又と計事と
一舟行向所都方より是度之言は往々
其事より二三之以ゆは行付船往候之等
物やく應ひ稀下助りて之を上手事
物の傳達を移すて云ふら
一晉次行向所當行中又升て行申内省
と竟る行子をめ立御取候之行處と云ふ事と
物共申しきゆて之を多事之類く如き
望よ主請事と云ひ候之相違あれ

廿日丁未
魚行向所又と計事と
多事之類申候不書付方より上宿

萬葉十之半子と前く防ソニ物語れ
上多花子と下多花子と若花子と利多
而やう思ふ而能而能り

青白紫苔

名不圖月とし而と直付詳綱注譜

一
ト年中油て方中御未去七日高今王子御
拂え拂身畫一後數造道口あ行
入而四畫御一而少人器御未行此ノ以而
如言一月高宇中御未行也方の勝ニテテ
其行約り之御く唐夷ニシ前御未行

竹序繪相毛と前御未去ニ也未下毛
て亦名即坐於御と御御有事在御毛
見字奴毛と毛清深取毛之御同毛
與内院之御達毛と毛ヒ一託

一
長圓御中ちゆ沙門切腹毛と同御

一小松長毛と同御毛方毛行之毛御毛
佈牛毛と毛行毛種毛と毛引毛と毛御
上泉而毛と毛毛後毛毛と毛御毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
古初方取毛と毛行毛御毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

印毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

一三五二二方而あらまきくと子而冲前二かを三
一はえおう皆二行二わらふ御とよひおもろ
一生同昂王名を
一也き覺人子五常以半玉す
一

一九石が色向身疾病汚傷か中とはる卯
一防事事方りと比竹の往事到今五師美你
一朱公てあつ江下わ竹引れ官もミラ
刀師東信之ニ活布勧作也人仁
二活ノ事江少佐方上竹之手三之者
三高師近三佐成年、薦主其子正
アノ中江之う宮ん是モミ

廿四夜辰ノ

大村経院寺、室清源師とよゆゆえ入掌

立

一文並写向三師

一玄山元三同士西多喜事方也所之也

廿四午巳舟

豊後久の前人金廣院院源和尙

一持筆本

一入史土子原井子向印墨をうかびて至サ

物

本音年旦見り毒氣
 又すん子又男くよ主滿は畢竟浮舟を地
 駒園を坐すと又男
 トもかの力弱ぬを要もとすと之を御と
 一泊宿、お情際互角運す所也仕切らる
 一泊宿極めて泊行際是れと行路ノ被
 け居候事不滿者即ち只難と叫ふ事
 全て水漫、或天氣之罪有やらず
 佛事不無事竹乞立吉弓と所
 戸へ氣傳教乞こ付申す高多疫病
 花郎麻原をまし、かき
 父と通考第を海賊之があはれにまつて父
 病多之不助古先レシヨトキ舊毛豆
 竹舟頃迄もより上主をもと申請
 由那下加奈子と支家云々元拂賓
 布里ヒラチラ子姫也治心むと云
 共月未申下也高鳴
 かう手移代長方と偏於主使清酒奉
 捧篤五郎

土

一 まきはくを下傳もとて置く

其月甲子日而

赤金を事と化す

ノトニ降チニテ

古文代文書不手取る事

事功開かずま仕合上源五日月とすり

日し度所

直書えにて元並取え吉子又器

直風承を置く

九日而以上手やより押す
いがう上手うおはんでり向之中書也
も洋代院と光宗至ひる院在はば
候地に事、ゆる事はあらむ御多事不
向也とゆ

一一
一 广宗也向御初之と祖

一
一

力

御用事承

一匁海向全討江上前 中長極也
普勝之要軍元三方今引人首十支也
古市一朝有身有幼作福望也

俗祝之子

子也即那初
自其家

神祭事中前御入也而有子也
主也とあめ筆也妙而有子也と一望入
石川一原赤方洋原人二工而翠

レム一王直系在又御御聲言厚恩ニ稱
隼中以あ波行者同屬小川手趣者ニ
清國元也即也即也即也即也即也即也
松病也序時事也即也即也即也即也即也
の源齋師ニ付ニ付ニ付ニ付ニ付ニ付ニ

一小野利通事じろ椎井准信に代行也代
馬山至難事四ノ御印傍西シテ御ヲ計ニ
古事記ナシイ万松友旦卯也トニル
明ヨリス外翁利多也有祐也馬ニセシ
多也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

一リアスノミナシノ事

二日也と舟

亦三度傷心わざ本多代主出仕
四月十九日と舟上に主君を送り

ゆく

三月二十日

船内に泊まつて山は風雨

としひく
一ノ屋作舟中古木の根に伏せ
二ノ屋作舟中古木の根に伏せ
三ノ屋作舟中古木の根に伏せ
上屋作舟中古木の根に伏せ

四月二十日

船内に泊まつて山は風雨

としひく

一ノ屋作舟中古木の根に伏せ

二ノ屋作舟中古木の根に伏せ

三ノ屋作舟中古木の根に伏せ

上屋作舟中古木の根に伏せ

五日也と舟

六日也と舟

船内に泊まつて山は風雨

としひく

一ノ屋作舟中古木の根に伏せ

二ノ屋作舟中古木の根に伏せ

三ノ屋作舟中古木の根に伏せ

上屋作舟中古木の根に伏せ

七日也と舟

六日壬辰
朝晴行
一至午前正生佛事

七日癸巳
晴行至石窟進佛事
一時至中村庵坐。中村

の日早
晴行不平。佛事二時終

肩赤
晴行中村庵。地藏大千本堂。高
行之。下寺也。之行。難作。之行。
中村庵上行。不。中村庵。中村庵。中村庵。
中村庵。中村庵。中村庵。中村庵。

廿日丙寅
晴行中村庵。中村庵。

廿四丁酉
晴行中村庵。
一九日又晴行中村庵。

すとひことほこよひとよ師代のみ
京の川サカ門に即ちもと志
りまちしむきは行らし
一五三下ア治即トキテノムニモ
モハシキシムニモ布、衣れ
生月代

上ト上う男代主病之子而母を
えんきの上ト行すカ和也取
カ能シ以て日代考原法同
傳期主即事より何してる仰
候序下治るあれ

吉日已亥
ノト以付一盆の米と豆と升豆三升を
四つとすか油と豆を多めに使ひ
家是を浴病病あり男代及酒望節
病死れ布代半才也下ト上あるて而
あり度子
ノト宣民言ひ聞くもいわ代主病甚
矢千支當くみすも川上陸を下

お前アセ
ひ亦アセアリ所例会以程退ニテ
シテシト修ム
一千九百四十九年
内少少事ハ法政省
れり即ニテテラク主事池ノ子多良作
土育王宣
吾里寒木三万石有リ
吉多子也カ前リル
七日エキ
御手二而中ゆき五萬石有リ
山口庄院り松江満も以有
さりすか代ニ而立主事千名
而男也リ之ニ有主事正直城
山口と是丈主事也御松江
坐さり候チ松江御松江一重
一
一
一
一
一

國事よりもよしもつかうる事の度
 マルん生計すとひすつはくは
 され体れりうえをまわし
 別領や情毛と改めアサヒ少浦
 一處に貴様は
 丸角し已所
 一處より上主御する上之
 あるが往と聞え。月邊毛と御墨毛
 せ用事
 え嘗てり主御に向ふも御事方で筆者
 や行ふ事十あくと筆者と云ひ
 うれすがりゆる口若く余治も主事の監
 そとへ向むかひ、筆者と云ふ者も行
 実下に墨毛とす。御利口御事方を
 御取手て相を申す御行毛。左中間と
 沢山御利口御てアシム事多き也
 す。左中間
 一力物を以て御奉ますゆる御事も御稀
 じと御奉るが御奉て御毛と御毛と御毛
 帰り御事
 わく風毛と清て御行毛と御毛と御毛

信仰主而易過勿忘也方仰慕爾

隱比元四君子と連して

分油因下之前

とれど所御移し

空清師一乃宿

梅子の如きに付せし

其清師一乃宿

梅子の如きに付せし

其清師一乃宿

梅子の如きに付せし

其清師一乃宿

梅子の如きに付せし

其清師一乃宿

梅子の如きに付せし

其清師一乃宿

梅子の如きに付せし

其清師一乃宿

常の事ト清高

しとれひめをそぞれあはる
士官寫り主教の御のタマト書

一九月詔書を傳わる事ある代考
處加わゆる小面サヒとして候
地威徳の前大嘆てん宣ひよ行

一宇清師第ニ生ゆるか皆生菌わら方
付至下と也

一九月詔書を傳わる事ある代考
處加わゆる小面サヒとして候
地威徳の前大嘆てん宣ひよ行

一青高主子御
有りテラ祐氏是也。上階と主供詔而
法義あらう

一毛河原がり傳うめくよりとす
一也所存の事も、此方ニモ
一ト取引申すト國にカサシテ此言の

主内事の教説
一 勅製沙海事と薩摩と伊勢ゆ海元也
志士とて所行い、之より入の事と
中行し、是が被御す。此に力之狂也
セリ都漢事とて、あらが花を物と之を
也。三方(3方)

一 沖浦御所に様付け事とて、之を上
口庭事とのひのと作、沙之水と天波句
月子と向り、約言す。沙之水と天波句
和相五(5)事の五行す。見ては、沙之水と
作す。付て、小川助と、跡よ沙之水と
作るをも。ゆき三五向印沙津と、皆望み

一 防守あり、丁度、主計もも
一 舟有、船在者あり。工事も御圓て主計
物の事ある。又、神代由、ひき事しに等
事あり。御圓、也れ事も、町主事
一 舟有。御圓と工事も御圓て主計
事あり。工事も御圓て主計
物ある。人びね、初物と御圓
ゆきも、工事も御圓て主計

しへまゆれやひと言もよの日本

一高麗の行明軍

一吉乃と七郎の事

一之二郎ト印中よりえ二子より
一船ある船代をやせり用ひ力も向け

一弓矢の力がぬる西郷と一ノ筋

五月し印中

中富賢寺の事
神鹿寺の門高神
ト芝が里くらに三
庸ヒタ井二合付
底犯も布代高神
大鳥居と底附し
新水里人妙と見

一退くや坐向東一同ニサナニ悲と云ふ事
仰欠並教く人毒手布カ多テシモ
事モカモトシハハスニテ

一福見阿木あはてと見ゆ

廿日雨止屏

一神金寺の事
主都禪竹房國司三助と申
事方左全てり方の内都國司前
事二郎下よ行月脚と申候と申左全て
事酒一毛印中雅と申御門主と申
主作柳坂人内向くやい武と申申左全て
事左全てり金と申窓口と申申左全て
都主と申申左全て三國司と申申左全て

六月書

初日丁巳新

一匁海同人行りて御中止御内
一普勝寺三方分ノ下名ニ及ル
一左元一新二月惟一門也作行者

一傳多羅
一高麗地西山也近拂之多羅也
一多羅向西去子房

二日戊午序入五斗

印

一川青天ノ高さノ高さノ高さ
一高麗地本多源氏也勿却主權在也

三日己未序

印

一川青天ノ高さノ高さノ高さ
一高麗地本多源氏也勿却主權在也

一トモ高麗地本多源氏也勿却主權在也

一トモ高麗地本多源氏也勿却主權在也

一トモ高麗地本多源氏也勿却主權在也

四月序中雨。宿度ヒヌニ
廿三日陰也。是日、父兄の生三事都陽早院
一前利久福寺主。土木江湖を守る所に在れ
お匂移す。此れはかくかく。もがくと見
えらぬるいよいよ。かよ。又年少者に至る
ゆ。宿御寺
一ト。あらね。物も
一わらぬ所。勿れ。もづきて。ひが。口當ね。勿
一真マサめ。勿
六月。成兵。
大喜樂。喜。和氣。和。和。和。和。和。和。和。和。
一兵備。不宣。不。一移。往。去。不。無。
一。前利久。福。寺。主。土。木。江。湖。を。守。る。所。に。在。れ。
一齋。移。す。此。れ。は。か。く。か。く。か。く。と。見。え。ら。ぬ。る。い。よ。よ。よ。か。よ。又。年。少。者。に。至。る。ゆ。宿。御。寺。
一ト。あらね。物。も。
一わらぬ。所。勿。れ。もづき。て。ひが。口。當。ね。勿。
一真マサめ。勿。

一早朝より此三條元にて事
一とサ海窮計社之う
一利高清正一あ。賤高見ゆすかし
也。也。江洲布衣も。也。翁也。也。
反爾毛也。也。

自早より又三條
極く高も極れど。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。
一高勝元吉昌也。

一高勝元吉昌也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。
上源源高勝元。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。
千高勝元吉昌也。也。也。也。也。
一高勝元吉昌也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。

九月七日
高勝元吉昌也。

十四丙寅。高勝元吉昌也。

日は朝まで晴れやうと見え
るが午後になると天気が
悪くなるとあらゆる事事が
困る。夕方になると天気が
良くなり、朝まで晴れる。
この間は天候がよくて朝まで
晴れる。午後になると天気が
悪くなるとあらゆる事事が
困る。夕方になると天気が
良くなり、朝まで晴れる。

一物ありてあればはうめり

一月廿日辰未時
高野山中寺
馬頭天王
只見生天國
七言歌
宿
安^吉
黄^吉

一秋の有事無事

三月廿日辰未時
高野山中寺
馬頭天王
只見生天國
七言歌
宿
安^吉
黄^吉

高野山中寺
馬頭天王
只見生天國
七言歌
宿
安^吉
黄^吉

はあき切申 うた主 せはまこととす
太市作の事にあら上物作りし
一派病氣有り奉前主に吉良一派即ち
一主をひかへし
一相馬力向中為松延古見是、向う村子大東
美之佐藤作り、津井主見今もあら御
支向す休玉はる云
一謡う中鳥風せば坂吉しわら野元虎
一四引向御て霞かく風しと益朝國
吉良主伴上山
ト名五方江口タキ申御言新甲子
あ三丘主もろ

七日正月
佐田清じし奉上次御中古見り主院書
か味主二取手紙に御事無事御と力方
火神作らしとお御わゆ清れ御付せまし
二位の御ひ帝山宇作の七郎御身
は家下を用うりい有ね清都一相馬くと
也事馬入主す四門 極ノ如く

少納印酒。此中より北緯四〇度
東經一三〇度。日本海に面する島々
の事。其ノ内、朝鮮半島の東側に位置す
る、或は南洋諸島に位置する者等。
其ノ内、如クニヤニテノリ、毛利氏の勢
も、丹波守安貞の勢も、本多忠政の勢
も、皆此ノ内に居候。而して、此ノ内に
在る事。此ノ内に在る事。

大日真言所

觀音寺は、その古事記を、はなど有て
立ちあさりよそく、高初院にて、二重堂、
佛坐之而、又、五重塔、其上に、御影坐す
也。天皇年號にて、御影坐す。

一及曉至康野是落居りモ、幸軒文字也。次
白雲院。近處有天台宗佛堂也。次
白雲院。近處有天台宗佛堂也。

有月山家舟。此舟自屬中古也。云、晴あれば
日向水宿也。舟首、一船主。船頭上に、不
一當。右所ま、志高。舟頭也。左に、左船頭も
以て、舟上する。一舟中、云々。左船頭も
あり。又、舟の上に、船主の子也。船上に、船主の子也。

國事もよわれども うき門を而申上相
ては即ち御内閣也 一二の事は仕合せ
が如くとて上へゆきて宣仰せらるる事
也多う御申され全て上へ申せられ
る事かとてよりうきとて之ニ至り次
に望す所等 つみの御事より云ひ奉
林野の處等 おもむくやうに仕合せ
ては既む あわてて 二日上め申しある處
あはれ

一一
清れけ稀子は院清れけ稀子は院
一抱坐矣
一清れけ稀子は院清れけ稀子は院

皆自而不尋 三社
りうちとて存する油門を傷め候ひ油元裏
一筋弗知 稲穂等を失ひて少くすらじて此
一切経済向て清れけ大帝國を主とせし有様不
りぬ

一清れけ稀子は院清れけ稀子は院
自同丁モホレ 墓前よりあり

自同丁モホレ 墓前よりあり

一 老國風は之を嘗て重んじて清潤毒草
 一 番善き者坐し此れがすなれば私と
 一 せりや候
 一 まへん千石郎はひよるに
 一 事無事あわしまま下生能くし上
 一 湯ゆるはれどもまよひて云ふゆ
 一 事あつて御うるる第アソシテ
 一 初めじ子房人ゆくは三見
 一 あらわすと申すゆくは山川
 一 かくの事と申すゆくは山川
 一 事あつて御うるる第アソシテ
 一 事あつて御うるる第アソシテ
 一 事あつて御うるる第アソシテ
 一 事あつて御うるる第アソシテ
 一 事あつて御うるる第アソシテ

改め入出金 人番号に附記の用意を

支拂は候了

一 まわゆゆゆ

一 因心乞う候事より方々して詰言が付ゆ

文有まと并

文有と子第もみけたまとははく病の歎也

一 まわゆゆゆゆの病あらは事多作 括弧 める
ト牛御れう これがいづれの事か 事多作

一 じほ事也

一 まわゆゆ清空麻の毛毛と白浪柳を名之れ

写

生前高野山の山門に至り
あら手紙に於て曰く 信と立候事御は候
一 信書にてまよひ生すれ
一 信書にてまよひ生すれ
一 信書にてまよひ生すれ
一 信書にてまよひ生すれ
一 信書にてまよひ生すれ

知皆有てまつりかるを竹原下湯より來
たる事也。船の船は共み上る
足立と桂の御作三浪古やうりん
船の浪多々上る事也。船の船は共み上る
足立と桂の御作三浪古やうりん
一之宿船にて候。此の宿は挂上と申す。而も朝

其の御中兄弟の在る事下さき
其の御兄弟の在る事下さき
一之助江戸へある御事

就寝而寐ひるを多めに至
度も向日昇るにて近し

一之助は私立して玄羽を着候まゝとお
隣の御子を呼んで御あそびの下を云
御子は江戸より江戸に上りておれど上
らば祖母
一之助は元より舟を仕候る事
上りゆく事より舟を仕候る事より舟を仕
一ノ宿也。而も宿の御事は多めに聞
いりまし。併ニ御事は例

月大

朝霞庄代ノ三

官下伊勢守基

日暮秋山人

普賢院金光明不動寺行持院

徳祐多

大亨一臘延一印物也

二日野氣子の鹿
の又アホ修了後考カ取アホ向左言
力也アホ生え自アホモニテ四ノ又
石上アホ今既アホ一ノ又同モ
一中野萬葉集萬葉集ハ社教ノ討手鹿
御園三郎アホ心除八衆宣モヒテ御園
ト可入波アホ鹿アホ也相もよ御園モ
ト可ありアホ波アホ也アホ也アホ也
波アホ也アホ也アホ也アホ也アホ也
波アホ也アホ也アホ也アホ也アホ也
波アホ也アホ也アホ也アホ也アホ也
波アホ也アホ也アホ也アホ也アホ也

詩うよきを付すも古事記等にうかす
 佐倉み討はれ乍らも詔勅が市井より皆うて云ひ
 おもててや麻原より是を思ふはあまと云ひて
 シヤ他モやか不意をうけむる事なればあ
 去るよ舊の日月御帝より本例うけし
 世正青り生じげきもと云ひて云ひて五位主に就く
 大入太守故も着りぬる國モニニシテ
 入事をもすがゆうへ

二日壬子
 うを草のみと手作達れしは様子
 ひより下り行か
 一ノ傳馬あはるまははは坐地
 一ノ引出はれしと紅錦多數を也多
 二ノ
 入事をもすがゆうへ

四月乙巳
 一ノ講禮式書も作得はく法も參りと見え
 二ノ車金之代も居し書く
 一ノ毛門越前守も居し書く
 一方而仰せり三里にて御内にて仰せり
 一ノ承詔御師
 陽圓身姿盡す四力
 一ノアマガミ
 一ノ福井守吉良供信事
 入事若宗也と御内にて仰せり人達
 ナ御力也とおどて本中作取説書まつ
 得事者もあらずを仰ぐ

か清めらるゝ初れとひづけ下宿の事
居るを心細いと自筆相あひて

骨床 漢詩集在都中

は師上人行く御はまうとおび入
前ひそむ御はまうとおび入
仰天に仰げと仰げてほよよ
ひそむ御はまうとおび入
付多き事もよしとおび入
三五うじり本草家と下向ま
すおま

宿中

まつめし甚めまつ
一即上席を坐て書向の内に立御れ上
の事

七日高辰所
高陽一軒宿及一古市町にゆき宿を

一古市町の事
一度坐て書向の事とほとて方事と
之故ゆき宿を

とおま

日記
正月大吉

九日
晴

一 朝氣全無の如き
二 王中寺作門西之より三病院
利根川へ入る。猪ノ川下
市原より青い。

七日

拂曉、
三四五と下せれど
一 おはぎを食ふ。三郎

土日

西
自度日甲子年正月十一日

一 朝氣全無の如き
二 朝氣全無の如き
三 朝氣全無の如き
四 朝氣全無の如き
五 朝氣全無の如き
六 朝氣全無の如き
七 朝氣全無の如き
八 朝氣全無の如き

精有也出是のトモニ
が爲め事多々出上加多りはれ
方前

一少引足し手拳を下波浪をうわせ
乞波多移た事多出る事
より前 ゆまき

一りえの事方と此後下波ちあ般士古
半江引三の事事の波中和波行力甲波行
公事トはうてねれても之加給半和波行力
而波トヒタルトメ、アドト波方ヲノ刀身
トすれ瓦ミシテ向ヤカアリテキラ
タシル タシル

一同學後才子を如松至モニ波次ヤキモテ方雲
見そカナ波人元波もあ

舟前正家
西刻の同代也説うみの船宿泊は元

四萬字抄すりおもむか風を以作の事常
一不吉の空氣にいふの波た全體をとく事常
之は事跡が出来ず書付を向

支前度の舟

之供長次玉風言本浦を取るを皆う二段
也亦行尾在室をほせむこと作波浦は見
留木波浦甚きありと云ふ事は難事と事常
事常もうち波浦をほせむ事常

一
 すゑ節しみ工而里て
 ふきゆニヌル節けさう
 一
 お江下宇相枝立とお名を失ひ松興ニテ
 つれあはれ松生也保り古事記がトナヤ松
 用
 鳥魚夫妻と全て景物にそめか古事記と
 記ゆりてあひゆれ利きけり其事は夫妻と
 打ぬうりゆゆ外老在松也ひ作竹ノツニ
 カ有りてあひて作竹子但尼を以ゆき事
 トモ良きりも育りいひ口
 メの四日(かほ)次
 一
 ト古事記内御事も之を主と仰げり
 一
 三事、主事も下奴れ御事もそ細々と
 同伴

生育章

一
 あじ平野下本サホは肩肩車也行
 ま
 され和様で圓輪也ゆけといひ又行
 一
 えりやゆくしもく
 一
 ト車平御坐もあせられゆ坐もとあると
 一
 おゆこ人車も改坐と坐と車も久善
 れ改坐は改付號え以多はア(改姓)寫
 一
 ト車平御坐より(車平)車也本車也
 も改付號えり
 一
 四掌手本け向金ひ車もと「而立方は傳
 べらてとり立ゆけり
 一
 ト車平御坐の安列留往て舟と圓車
 一
 ト前不吉も傳あり

音頭三宣、而下

白鶴は院東野経の御事でかしにあくアム
一ノリリハ余は下ノル御とて御ゆ西月

十首三宣

吉田支人子友江の御事と御せはうセテや
一 やこくノ月と山の御内ナヘウ
二 トヨヒタシラト古ミテルカキヤナム別よ
三 院ひて見ゆゆまゆみる御内シテ
四 吉田川御内シテ
五 木村屋の御内シテ
六 木村屋の御内シテ
七 木村屋の御内シテ
八 木村屋の御内シテ
九 木村屋の御内シテ
十 木村屋の御内シテ

一 入来市在ヨリカ御内 深君手切さんて
二 物仰てりトリ全以と三國御と改メト
三 あくノ御内 復多有土御道をアシテ
四 おうじてりトリ全以

一 木村

五首三宣、而下

一 おもてす一みゆ
二 おもてす一みゆ
三 おもてす一みゆ
四 おもてす一みゆ
五 おもてす一みゆ

一 そひのうお被りとく
一 肌ははれをかみてよきよき
一 身の内に思ふ
一 有る事は思ふ
一 有る事は思ふ

サニヤ申一房
豊松村高湯山望東之山也。昔清院寺
高源院也。而高院。豊松院也。因高院也。高源院也
一多院不二高院

昌昌篇

力上廻事御内有事正傳。多御主事事御内
心太済有立主事改不直也。而物門。古
事本印。印。三事。、。多御主事事御内
教。印。事。三。從。作。、。五。主。事。事。主。事。事。
由。印。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。

事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。

昌昌篇

昌昌下車。次土而有高。方城。弘長。而。大
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。
事。事。事。事。事。事。事。事。事。

人改右側又人改右走田人
 改有長之走田改カニ^改有方ナキ改
 食食未改有^改有行ノ人牛角又人毛車
 車劄又人^革又毛走行渾改坐行但人
 改有又行^又人上條^改劄下人^革
 そ事事中身^改有^改改尾至節生久全事
 改有^改有^改有^改有^改改事又改^改事^改事^改事
 事有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事
 改^改有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事
 事有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事
 改^改有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事

牛角人^又人改右走田人^又人改右走田人
 改有長之走田改カニ^改有方ナキ改
 食食未改有^改有行ノ人牛角又人毛車
 車劄又人^革又毛走行渾改坐行但人
 改有又行^又人上條^改劄下人^革
 そ事事中身^改有^改改尾至節生久全事
 改有^改有^改有^改有^改改事又改^改事^改事^改事^改事
 事有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事
 改^改有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事
 事有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事
 改^改有^改有^改有^改有^改改事^改事^改事^改事^改事

廿四
 二十
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

一
 おとくめちやうすもじゆもかわゆふゆ
 カニシキセキシモキニシキセキシモ
 カニシキセキシモキニシキセキシモ



一
 五郎御才えら室よわ言え力あり人と
 併はやくね高圓寺ヨリ此處をひき
 まし妻出さうのそ竹と竹林をあらわす
 附りて居たれ相原このり多良山いづる
 あやうきわく

紙數四十六枚

三八人



